

## 互いのよさに学び合い、温かい心を育む授業を目指して

高度学校教育実践専攻

教員養成特別コース

内田 有飛

実習責任教員 金 森 三 枝

実習指導教員 藤 原 伸 彦

キーワード: 受容的なかわり 温かい心 認め合う 学び合い

### 1. 課題設定の動機と背景

筆者の理想とする学級は、児童がお互いを尊重して認め合うことのできる温かな学級である。基礎インターンシップでは、新しい生活様式にストレスを抱えながらも、懸命に日々を過ごす児童と関わった。マスクで過ごすことが当たり前になり、表情も見えにくく、声も聞こえにくくなり、周りの人の気持ちを読みとることが非常に難しくなった。そのような時代を生きる児童にとって、一層重要となるものは、コミュニケーション能力や温かい心であると考え、筆者は、どんな時代であろうとも、常に人と人のかかわりを大切にする教師を目指していきたい。そして、児童にとって互いのよさに学び合えるような授業を通して、それぞれのよさや個性を認め合うことのできる温かい学級を築いていきたいと考え、本課題を設定した。

学級経営と学習指導は両輪の関係性にあると筆者は考えている。学級経営が上手くいかなければ授業も上手くいかない。また、逆も然りである。学校が安心して楽しく通える場所となり、様々な関わり合いを通して温かい心を育むことができるようにしていきたい。学校で過ごす時間の大半は授業が占めている。その授業を通して、一人一人のよさを生かす学びを実現し、思いやりのある心や態度を育てていきたいと考える。

### 2. 授業実践及び分析・考察

#### (1)基礎インターンシップの授業実践

##### i)授業の概要

第1学年道徳「かぼちゃのつる」(1/1)

本単元では、小学校学習指導要領特別の教科道徳で設定されている道徳的価値の中で、「A主として自分自身に関すること」の「節度、節制」に関わる単元である。筆者のねらいとしては「周りの人に思いやりをもった行動ができる」という設定にした。本時では、登場人物の気持ちを細かく見ることで、感情の変化や揺れ動きに対して児童一人一人が、自分自身の意見をもつことができるようにした。

##### ii)成果

基礎インターンシップでの授業省察では、成果として発言しやすい環境づくりがあげられた。実習中は、児童との時間を何よりも大切にしていたため、どのくらいの声の大きさで、速さで話すと伝わりやすいのか考えながら授業を実践した。また、受容的な雰囲気をつくることのできるように、児童の発言をしっかりと目を見て、頷きながら聴いた。そうしたことが児童にとって発言しやすい環境の要因になったと考える。

##### iii)課題

今回の単元では、「じぶんもみんなも ころちよく すごすには どうしたらいいのかな。」というめあてを設定していた。しかし、

筆者は道徳的価値についてあまり知らなかった。そのため、「節度・節制」を基盤とする内容であるのに、「思いやり」を中心として取り扱ってしまい、児童を混乱させてしまった。かぼちゃ視点の「わがままをしてはいけない」なのか、みつばち等の「みんなが気持ちよく過ごす方法」なのかがはっきりとしなかった。また、なぜその問い返しをするのか、なぜその発問をするのか、良く分からないまま児童に投げかけてしまった。児童との1対1のようなやり取りばかりになってしまい、全体へ共有し、学級全体で広げる事ができなかった。授業を通して一人一人の考えを全体で共有しながら、いろいろな考えを大切にしていかなければならないと考える。

## (2)総合インターンシップ I の授業実践

### i)授業の概要

第5学年国語科「和語・漢語・外来語」の授業を実践した。それぞれの特徴から和語、漢語、外来語を分類できるように授業を構成した。また、研究テーマに即して、児童同士の学び合い、話合う時間を取り入れたいと考えた。

### ii)成果と課題

筆者は、教師と児童の受容的なかわりができるように意識して授業実践を行った。声の大きさや話すスピード、また、丁寧な机間指導や根拠に対する問い返しができるように、常に心がけていた。また、児童の発言に対して、褒める場面を増やしたことで、児童の考えや想いを受け止め、教師と児童とのかかわりを多くつくることができたように感じる。机間指導でも同じように、教師自身が温かい言葉で児童の考えを肯定することを重視した。

しかし、児童同士の受容的なかわりの時間

をうまくつくることができなかった。3種類の言葉の意味を理解させ、分類できるようにする活動に時間をかけすぎてしまった。また、全児童の発言を大切にするために、新聞から探した言葉を黒板に貼りだしたが、それに対するまとめがしっかりとできず、学び合いができなかったため、正確な知識の定着まで行うことができなかった。ワークシートの中にある感想の欄には、友だちとの話合いの時間が上手く取れなかったことから、友だちとの話合いで答えを見つけることができたなどの内容の感想を記述している児童はいなかった。

発問や問い返しでは、知識の定着に重視しすぎた。そのため、一人一人にかける肯定的な言葉が減少してしまい、正解を導き出すような流れになってしまった。筆者の目指す発問や問い返しは、知識を定着させた上で児童のよさを引き出すことである。この授業でそうした発問や問い返しが行えなかった理由としては、新聞で言葉を分類する時間を多く取りたいという気持ちが先走りしすぎてしまい、児童の考えのよさに着目できなかったことが考えられる。

こうした課題を踏まえ、総合インターンシップ II では以下の3点に取り組む。

1つ目は、児童対児童の話合いが中心となるような授業を実践する基礎インターンシップと総合インターンシップ I を終え、今までの授業スタイルでは、教師対児童の対話が多くなりすぎているということに気が付いた。筆者の育みたい児童の能力が確実に身に付けられるようにするには、まずは授業の中で児童対児童の話し合う場を増やしていかなければならないと感じている。

2つ目は、学び合いの場をつくるためにグループ・エンカウンターを実践する。学び合うと

は、児童が考えを出し合う中で、一人一人の発言を尊重し、比較したり、分類したり、関連付けたりしながら、自分の考えを深めることであるといえる。授業においてそうした場面を増やしていくために、必要な発問や問い返しをしっかりと考え、授業実践を行いたい。お互いの考えを受容していく環境をつくり、授業の中で自分の意見を伝えやすくするために、グループ・エンカウンターを実践してみようと考えた。実際に9月後半に授業とつながる活動を15分ほどで実践した。また、学び合いの場として、ホワイトボードやタブレットなどを使い、お互いの考えを共有していく。

3つ目は、常に友だちの意見を大切にするように伝えていく。友だちの意見を大切にすることは、常にもつことができるように授業内でも声をかけていくように心がける。現在、授業でタブレットの使用が増えてきた。そのため、児童たちが自分の意見や考えを提示しやすくなったと感じている。そのような方法を使ったりし、授業のグループ活動の中で、全員の意見をもとに考え、友達の意見のどんなところがいいところなのかを常に考えられるようにする。そのためには、普段から友だちの意見を大切にするような声かけを実践していく必要があると考えた。

総合インターンシップⅡでは、この3点の課題に沿って研究を進めたい。

### (3)総合インターンシップⅡの授業実践

#### i)授業①の概要

第5学年道徳科「心のレシーブ」の授業実践を行った。本時のねらいとする道徳的価値は、友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくことである。いろいろな考えを引き出す

ため、事前学習として、いいところ見つけの活動の時間をつくった。また、話し合いながら活動することに加えて、全員の考えのよさを知って認め合える時間も今までよりもさらに多く設定した。

#### ii)授業①の成果と課題

授業実践とつなげて、事前にグループ・エンカウンターを行った。授業の中でも、「友だちのいいところを見つける。」といった意見が多く見受けられた。しかし、グループ・エンカウンターは、授業とつなげて事前に行うと効果が出るものの、児童の普段の様子や、一人ひとりの個性などを細かなところまで把握した上で計画をしなければならないと考える。

また、今までの授業実践と比べ、児童同士の話し合いの時間をつくることができたように感じる。自分の考えをワークシートになかなか記入できなかった児童に「書いてなくてもいいよ。お友だちと話し合っているよ。」と声をかけると、進んで話し合いに参加していた。その後、児童のワークシートを確認してみると、びっしりと考えを記入していた。発表の際も、1番に挙手し、友だちの意見から考えた、自分の意見を発表することができていた。このことから、今までの授業実践と比べ、児童同士の話し合いの時間をつくることができたことにより、児童の考えが深まり、児童同士の話し合いをいかした授業展開ができたのではないかと感じている。

#### iii)授業②の概要

国語科『カンジー博士の暗号解読』（光村図書5年）の実践を行った。カンジー博士と一緒に、アンゴア教授からの暗号文の読解に楽しく取り組むことで、漢字の読み方について習得していく教材である。教科書の設問にある暗号を解くことはもちろん、自分たちで暗号を作って

出題し合う活動を取り入れることで、児童の意欲を高めながら学習活動に取り組ませ、漢字の面白さに気付くとともに、友達の考えの面白さやよさに気付くようにしたい。

#### iv) 授業②の成果と課題

全体のインターンシップの中で話合いの時間を一番多くつくることができた。ワークシートを選ぶ段階から、話し合う必要性がある活動にしていたため、児童も常に話し合っただけで活動ができていた。授業中に行ったアンケートをみると「(1)友だちと協力してできたこと」には、100%の児童ができたことと記入していた。今回は自由記述の欄を設けたため、児童がどんなことを協力してできたと感じているのかが詳しく見ることができた。どのワークシートにするか話し合っただけで決めたり、作ったり、他のグループのものを解説したりする活動を通して、「協力をがんばられた」と感じている児童が多くみられた。

また、「(2)他のグループの暗号を解いてみて気付いたこと(他のグループの友だちのよさや面白さなど)」では、友だちのよさについて書かれていたのは、26人中12人と約半数を占めていた。中には、「あの班はよく意見を出して、楽しそうに話し合っていた。」と、隣のグループの活動の様子をよく見ている児童もいた。

授業以外と授業内の双方において声かけを大切にすることで、些細ではあるが、児童に変化が見られた。意見が食い違いそうになると、

「ちょっと待って。話聞こうよ。」といった言葉が多くなった。また、「それはおかしいよ。道徳でしたじゃん。」と声を挙げる児童も出てきた。

総合インターンシップでは、指導教員の取組

から多くのことを学ばせていただき、児童の1年間での成長を見ることができた。

### 3. 今後の展望

大学院に進学し、様々な授業を受け、筆者の育てたい児童像や学級像が段々とできてきた。それが、互いに認め合い、尊重し合い、学び合う環境をつくり、温かい心をもつ児童を養うことだった。基礎インターンシップ、総合インターンシップ I・II を通し、様々な経験を積むことができたのではないのかと筆者自身感じている。今までは、自分がどんな風に学級を導きたいか、どんな授業をしたらいいのかといった、筆者が主体となった考えしかできていなかった。しかし、今は、児童にどんな力を付ける必要があるのか、児童一人一人が笑顔で過ごすことができるようにするためにどんな活動をしていくべきなのか、児童が主体となった考えができるようになってきた。学級経営や授業は教師の自己満足ではなく、児童の学びとなり、資質を育てる場でないといけないと筆者は考える。

教師はファシリテーターとして、子どもたちとともに授業や学級をつくっていくものだと考えている。児童が自分たちの生活を楽しく快適にすることができるように、自分たちで考えていかなければならない。そのためには、お互いの考えを尊重して話し合い、考えを共有し、よりよい方向に進めていく必要がある。筆者の今回のテーマは、そのような活動を児童自身ができるようになり、これからの社会で生きていくために必要な資質を身に付けていくことができるようにすることが最終の目標だと考えている。春からは実習生ではなく、教師として、これからの社会で生きる児童にとって必要な資質を身に付けられる教師を目指す。